

第18号 20円

昭和44年 8月25日

内容

真理愛の拠点	1
開館4周年祝	2
大学セミナーハウス	3
同心千人を必要とし	4
今こそ政治が人を必要とする	5
グラフに見るセミナー	6
大利用状況	7

# セミナー・ハウス

## SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》

東京都八王子市下柚木  
電話 042 6-76-8511~2

《東京事務所》

東京都中央区日本橋本町3の3  
三井銀行本町支店ビル5階  
電話 東京 (270) 4431  
振替口座 東京 74590番

編集・発行人 飯田宗一郎

製作 中央公論事業出版

「愛は盲目」ということばがあります。相手がどのように出ようとも、自分は無条件に愛する、それが純粋な愛である。しかし、真理に対する愛となると、真理というものは、盲目ではありえない。「愛は盲目」といわれる場合、そこには、真理とは無関係な盲目的な態度がある。「自分はどんなに打ちめされても、愛し続ける」ということと「真理を愛する」ということは矛盾するのである。か。こういう問題が、つねにくり返されるのであります。私は、真理をほんとうに愛するならば、ある意味では盲目的な、全心的・全霊的なすべてをうちこんだ姿勢があるので、ではないかと思っています。

それでは真理とは何か。ヤスバースは、「真理」ということばは太古いのない魔力をもっている。真といえ、私たちにあっては、ほんとうに大事なことすべてが、そのなかに含まれる、それをいおうとするかのごとくとれる」といった意味のことを述べています。

真理とは何か、ここに哲学が生まれるというか、哲学の最も重要な研究題目の一つがあります。国会図書館の入口に、「真理は汝等を自由にするのであらう」といったふうのことがギリシャ語で書いてあります。これには、だれも異存はないでしょうが、ここでまた、自由とは何か、と問いたせたいへん議論になります。私は、それを説明するために、拠点という

ことばを使います。真理愛をもつということには賛成、同感だろうと思います。では、それを実現するために、どういう立場あるいは足場―拠点をどうつか、ここであります。真理愛というものは、単数あるいは抽象名詞かもしれませぬ。しかし、拠点は複数であっていいし、なければなりません。大学では学部学科の専攻に分れますが、これは研究の拠点です。ただ、その場合にも、具体的な専門・研

究室の問題から離れて共通な、だれでもが認めだれでも持たなければならぬ拠点があるにちがいない。そのかたち、方法は複数であっても、ある精神がそこに貫いているのではないだろうか。それをわれわれは求めようではないか、といういき方もあると思います。

真理には、三種類あるといわれています。まず第一に、真理は偽りでないこと、ほんとうに実在するということがわかったときに、それは真理であるという。たとえ



**真理愛の拠点**  
東京大学教授 前田 護郎

を立証するのです。真理には、こういう面があります。よくいわれるノン・フィクション、実話です。では、小説は真理ゼロのフィクションかという、必ずしもそうではありません。小説も、やはり人が真実であると思った、あるいは真理であると受けとってくれようなことを書けない。ある小説家が、すでに電化されている確水峠を「蒸気機関車が苦しもうに煙をはいて登っていった」と、まちがえて書いたため、非常に批

判され、結局、書き直したことがあります。フィクションの世界であっても、人の心に事実としての真理を呼びおこすような書き方ではないべからぬ。ある情景を描写して臨場感をひきおこす必要があるのです。真理というものが、いかに力強いかを示す例であると思います。

次に、それならば、たとえば古典のなかに作り話、虚構でない真実なものがある、ということがわかった。それがはたして本当か、真理であるか。「古代において戦争があったということが知りた

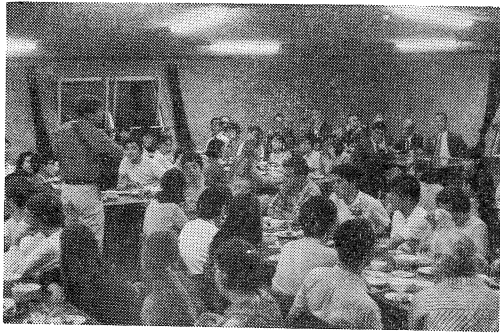
い。ほんとうに戦争があったことがわかった。したがって、歴史家が、戦争があったと書いているのは正しい」これが、第一の真理です。そこで、「その戦争は当時なくてはならない戦争であったのか。無益な戦いではなかったのか。その戦争は正しかったのか。平和を保ち、平和を築しむような幸福な社会が、なぜ、できなかったのか」と、だんだんつきつめると、いかにあるべきか、すなわち、真理というものはこうあるべきだという solid の世界が提起されてまいります。事実上、歴史とは無関係に受けいれることができる真理というものがある。これが第二の真理です。人々が平和のうちに、ケガもなく貧しい人もなく協調できることが望ましいということは否定できないでしょう。

(二面につづく)

# 開館四周年を祝う夕べ

朝永振一郎、山内恭彦両博士、  
加藤東大総長などと共に祝う――

昭和44年7月5日



人と木を植えつづけて、ここに満四年。グループにして二、二六五組、宿泊者延一四、五九〇人が、この丘で研学修練の合宿生活を経験したわけである。

この土地は、戦時中に樹木を伐採し、雑木林がわずかに残っていたが、あのゼミナール、このグループの寄附の植木、さては特定の個人を記念するために植えられた数百年の記念樹がすっかり成長して夏の木蔭をつくるようになった。宿舎村にも並木道ができた。ゼミナールの丘に植えた人と木は四

年の間にすっかり成長した。

創立四周年は、とりわけ祝うこともあるまいということであったが、にぎやかに人を楽しませることの好きな飯田専務理事は、開館記念日が近づくに、にわかにアイディアが浮かんだらしい。大学共同ゼミナールの常連、企画委員のおなじみなどを急ぎお招きして、内輪の祝宴を開くこととなり、次の先生方が一緒に、今日の盛況をお祝いしてくださった。

加藤一郎東大総長、朝永振一郎、山内恭彦両博士、総山孝雄（東京医科歯科大）、児玉久雄（学習院大）、小堀巖（東京大理学部）、小城正雄（東京大教養学部）、山本和代（日本女子大）

大食堂は、同日在泊中の内外の学生で満員。アメリカの大学生四十余名、日本女子大、学芸大、大妻女子大、ほかに数大学混成の英語グループなど百数十名が祝賀晩餐会に参加。六時三〇分、来賓の諸先生を会場に迎えると有名人の顔にしばらくさわめきと拍手。遅参の加藤東大総長が堂々たる姿を現わされると、この人がだれであるかは他大学の学生でもすぐわかり、歓迎の大拍手。紛争の場になれた加藤総長も、なごやかな雰

囲気の中に笑顔をもってとけまされた。司会者が各ゼミナールを紹介すると会衆これに拍手し、大学の区別を忘れた大学ゼミナール・ハウスならではの環境を現出した。

飯田専務理事は、今日の喜びをかくしきれず、まず感謝の挨拶、ついで来賓の諸先生を順次紹介され、諸先生もその人らしい短いお話をしてくださった。大学のレベルを高くするために教授も学生も勉強することだという山内先生、ドイツ留学当時の学寮生活の思い出からゼミナール・ハウスの効用を語る朝永先生、ゼミナール・ハウスの企画委員として参与されたことのある加藤総長は、安田講堂占拠の直前にアメリカから帰国し、そのあと東大紛争のなかで役割を持たねばならなくなった事情や、大学改革に対する熱意などを、アメリカの学生にはあの地でのすばらしい生活を英語で語られた。

アメリカの学生の巧みなギターのリードで数々のフォークソングが歌われ、日本の学生がこれに和すなど、社交性に富んだアメリカの学生たちがいたので例年になく開館記念日を祝うことができた。

この日を祝い、全学生には、当ハウスから紅白のまんじゅうを贈呈した。先生方も貧弱な料理にもかかわらず、会する顔ぶれがよかつたのか、時を忘れて歓をつくされ、来年の五周年は盛大にやろうと約束して帰途につかれた。

(一面より)

ですから、「それには、どうしたらよいか。それが破れた場合には、どうしたらよいか」というところで意見が分れるのでしようが、根本においては意見の一致をみることができると思うのです。

私の体験ですが、戦争のためにヨーロッパから帰れなくなり、一人でほっぽり出された。しかし、自分では、ほっぽり出されているとは感じませんでしたし、淋しくもなかった。不思議なのですけれども、友人たちや先生方が心配してちゃんと道を聞いてくださったのです。私が全部自分で外国語を用いて話したからでは決してありません。ことばをこえる大きな力と申しましようか、友情あるいは愛というものはことばを上まわるものです。逆に申しますと、すべてのことは人間のことばでいいつくせない。しかし、ある事実が人を動かすことば以上の力となる。

それを芸術の世界において言語で表現しようとするのが文学であり、論理的な体系を立てて示すのが哲学であり、あるいは、それを整理して記述していくのが歴史です。真理というものは空理空論ではなくて、人間の心のなかに真実なものとして働きかけるときに、その真理が力を発揮してくるのです。第三の真理は、人間性をつきつめていくと、そのときに残る、そのときに求められるべきものであり、また、そのときに与えられ

る真理であります。これが真理そのものといましようか……かくれているものがあらわれる、ギリシャ語では *aletheia* であり、ヘブライにおいては、真実という心の状態と結びついております。特に、ヘブライの精神をいかす新約聖書には、真理ということばが頻繁に用いられています。その一つが「真理は汝等を自由にするであろう」ということばです。

学問というものは、実際においては、真理が体系化されたものです。しかし、人間の力に限界があるので、すべての学問をすることはできない。したがって、学問の一部を専門とする。が、それは、ごく一部であるから、全体を忘れないことが必要である。学問をするのは人間であり、人間が真理を研究し、探究している、真理を愛している、人間のことばをもって表現している、その表現されたものを学ぶのが学問であります。そこにおいて非常に大事なことは、どんな学問でも人間の学問であるということ。真理愛というのが、各々の専門分野において、それを拠点として推進されるとき、ほんとうの力を発揮してくれているのではないか。それから離れた時に、あるいは自分だけの利益のために勉強をはじめたとき、必ず挫折感が訪れる。私は、そういうときのこないことを願うのです。

〔新入学生歓迎セミナー〕全体講義の梗概。文責・編集者

千人会

▼大学セミナー・ハウスは  
同心の千人を必要とします▲  
現在の会員はまだ四一一名です  
開館五周年を目標にもう五八九名を!

開館四年、利用はいよいよ好調で、すっかり日本の大学のなかに根をおろしました。しかし経営は不安定です。当ハウスは基本金わずか五〇〇万円の貧しい民間の一人法です。事業の性質上、ヒモつき補助金は避けなければなりません。学生の人間形成には真理と自由が実在している教育的環境が必要です。日本の社会は、利害関係を離れて、他日、社会に還元されるようなものに投資することに慣れていません。授業料収入に依存するため私立大学が特色を失い、マス・プロ化する理由がここにあります。

当ハウスを維持する収入をどこに求め、誰れに負担していただくのがよいでしょうか。学問に経験ある教師が若い学生を指導するために宿泊するのですから、利用料金は極力安くしたいのです。対立と不信を克服して、尊敬と信頼のうえに当ハウスをおきたいのです。大学紛争の背景にはあまりに非人間的、非教育的要素が多いからです。千人会は慈善事業の後援会ではありません。明日の日本をつくるための投資であり、一人一人が大学教育に参加する参加費であります。支援すれども支配しない協力金であります。

千人会

第七回報告(申込順)

- A Ⅰ年額 一〇,〇〇〇円 国際基督教大学教授 C 長 清子殿
- B Ⅱ年額 五,〇〇〇円 藤永 鉄雄殿
- C Ⅱ年額 三,〇〇〇円 日本経済新聞記者 奥 繁光殿
- ご入会を感謝申し上げます
- A 松下電器中央研究所長 津田塾大学大学院生 C 市川 節子殿
- A 日立造船社長 松原与三松殿 東京大学総長 加藤 一郎殿
- B ソニー社長 井深 淑子殿 上智大学学長 守屋美賀雄殿
- C 東京工業大学教授 川喜田二郎殿 青山学院大学教授 山内 二郎殿

千人会費払込者芳名 (敬称略)  
●お誕生日ーおめでと  
うございます

ありがたく  
拝受いたしました

◆四月生れ

- 二宮永藏、染谷恭次郎、加藤 寛、村上正夫、犬塚 博、井上宇市、高松松吉、和田昌衛、山崎 誠、井上百合子、佐藤 弦、関根隆光、塩田庄兵衛、東 洋一、新見 宏、石井千尋、大槻盛一、土橋 清、須田豊太郎、一柳富夫、小泉文夫、村田和巳、山内二郎

◆五月生れ

- 玉真秀雄、野見山不二、阪本 泉、高橋忠次郎、千野龍男、荒井 献、撰也、榎山欽四郎、徳永勇雄、川口 弘、長藤 寛、藤井耕一、中村英雄、山本幹夫、大橋健八郎、芹沢 栄、奥山典生、中村孝俊、大原栄一、芳賀 徹、長谷川幸男、大野泰雄、小池勇二郎、川喜田二郎、渡辺彰

◆六月生れ

- 芝川栄三、前田護郎、望月経治、市井三郎、笠松 章、松井源吾、大河内晁男、古本捷治、谷 清、朱牟田夏雄、山根艶子、川田 侃、鳥海俊宏、田中未来、萩原 弘、岡田正弘、長 清子、松村康平、柴田恭二、吉田幸弘、西川 治、道喜美代、松尾浩也、古沢潔夫

新年度事業計画成る  
企画委員会を開催

昭和44年6月19日

大学紛争のため、委員の先生方も多忙をきわめておられたようでも、今回の委員会では欠席された先生もあつたが、左記の方々が元気なお顔を見せてくださった。大学セミナー・ハウスの年次計画や長期計画の相談が終わると、話題はもっぱら大学問題の方に移り、有益な意見交換の場となった。

●出席者(敬称略)

- 山内恭彦、松田智雄、川原栄峰、鈴木皇、乾崇夫、芳賀徹、久保田きぬ子、星野命、早川豊彦
- 松田委員長は挨拶とともに、新たに委員に委嘱した立教大学の久保田教授、ICUの星野助教授を紹介され、ついで飯田専務理事の説明に入り事業計画を討議した。
- 一、共同セミナー  
(六月) 新入生歓迎セミナー  
(十一月) 日本人とは何か  
ー日本人の思想成立ー
- (一月) 生化学ー生命  
(二月) 科学と政治  
<将来のセミナー計画>  
言語と文化人類学、文化と科学史、現代世界と芸術、日本文学と比較文化
- 二、出版活動  
◇大学と人間叢書および大学セミナー・シリーズの刊行推進

◆開館五周年記念論文集刊行  
三、建築計画  
◇文部省補助金によるセミナー室と二十六人分宿舍の増築  
◇日本自転車振興会補助による卓球室の新築  
四、敷地拡張と土地の買収計画  
政府対策と資金の借入など

昭和四三年度決算

山田・太田両監事の会計  
監査終わる

昭和四三年度決算は藤永鉄雄経理課長の手で進められていたが、中川英男経理士に帳簿検査を委嘱し、資産内容と記帳の照合、貸借対照表と決算書の作成などを行ない、決算の事務が終了したところ六月七日監事である山田良之助、武蔵工科大学長、太田敬三東京医科歯科大学長にご来館願ひ、半日を費して詳細な監査をうけた。

監査の結果相違ないことが証明され、ここに昭和四三年度決算を完了したわけである。

●経常部

収入 三三、九六一、七四一元  
支出 三三、六三五、五七一円  
残額 三二、六一七〇円

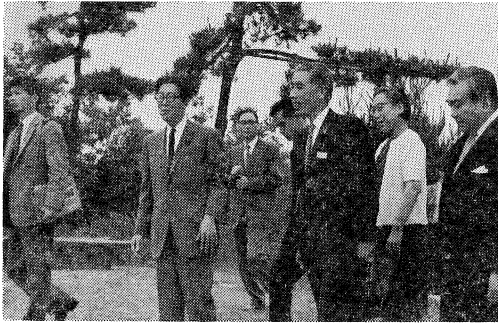
●臨時部

収入 七八、五五三、五三二元  
支出 六五、四九九、六七〇円  
繰越額 一三、〇五三、八六二元

## 今こそ政治が大学セミナー・ハウスを守るべき

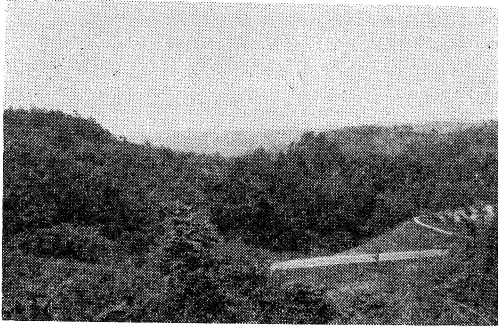
大学セミナー・ハウス創立の歴史は崇高である。人間の善意がまぎらず存在し、その後建設資金が与えられ、企画運営に大学人の参加があったからである。世人は無から有が生じた昭和の奇蹟というが、日本の大学が多年要望していたものを現実化したにすぎないものである。さればこそ年間セミナー七〇〇回、利用者三三、四〇〇人という成果をあげることができるのである。

開館ここに四年、思いがけない視察中の坂田文相と飯田事務、久保田・松田の両先生



大きな危機に直面してしまった。急激な宅地開発の波が当ハウスの周辺にまで押し寄せて来たからである。大資本の不動産業者から中小さまざまな土地ブローカーが美しい多摩丘陵にブルドーザーを持ち込み、自然は日ごとに破壊され、大都市で勉強する学生にとっては唯一のオアシスであるこのセミナー・ハウスは、緑を奪われようとしている。

大学セミナー・ハウスはその構想の源において、その実現の方法(八月十日)。しかし借金です



において明らかのように、国の文教政策とか学生対策というようない動機によって建設されたものではない。教師と学生が人格的接触をすでに深め、大衆化した大学のなかで人間関係を回復する場所であることを実証し、社会もこれを認めている。かくのごとく、日本の大学のなかに占めるセミナー・ハウスの存在が大きいとすれば、その大学セミナー・ハウスの教育的環境が破壊されようとするとき、これを守るには政治の任務ではないであろうか。民主政治のよい実践の機会であろうと思ひ、国会請願の署名運動にも、自民党文教部会長谷川和穂氏や、坂田文相大臣を迎えての懇談会にも学生諸君に参加してもらった。

### 坂田文相大臣を迎える

学生が「このすばらしい自然を守ってくれ」と訴える

坂田文相が視察に来られるという内報があり、六月一二日それが実現した。数々の大学紛争と議会活動に心を勞するなかで、閑をぬすんでの来訪であった。

文相も、ここばかりは静かな学問の場所であることを知り、楽しく学生たちと対話をしたり、セミナー室で飛び入りの講義を行な

たりされた。松下館の屋上では、当ハウス周辺の宅地化の現状を眺め、「国の補助金を要請し、それによって東南に接続する丘陵地を買収し、この丘を永久に教育と学問の聖地にしたい」という飯田事務理事の説明に、こんなときこそ政治が力をかけて助ける責任があることを痛感されたようであった。

ここがすっかり気に入った文相は、予定の時間を延ばし食堂で学生たちと昼食をとにし、大学紛争から大学立法、開かれた大学の新構想、セミナー・ハウスの効用などと話しがはずんだ。学生から土地買収に骨折ってくださいと強くたのまれ、文相も協力することを約された。こうして大臣が学生から信頼されるようになる、日本の大学の現状は好転するのである。

なお、企画委員長の松田智雄教授(東大)、共同セミナーの指導者の久保田きぬ子教授(立教大)も、文相との応接に当たられた。

### 谷川自民党文教部会長

敷地拡張運動に強い関心

政治の具体的活動は議会である。政治が大学セミナー・ハウスを守るといふことは、教育活動に参加することではなく、土地を買収する予算をつくるというその一

事である。そのことが実現すれば政治は大学セミナー・ハウスを守ったことになり、われわれは政治を信頼することになる。

自民党文教部会長谷川和穂氏の政治的見識が、大学セミナー・ハウスの存在を高く評価し、あえて環境破壊の危険を防止するための協力となって現われたことに敬意を表したい。

谷川和穂氏は五月一二日多忙な議会活動の最中を当ハウスの現地視察に来訪された。おりから、堀米庸三東大教授を中心とする「ヨーロッパとは何か」の共同セミナーが開催されていたので、参加学生とともに夕食をとり、食後催された懇談会に参加、午後一〇時近く辞去された。

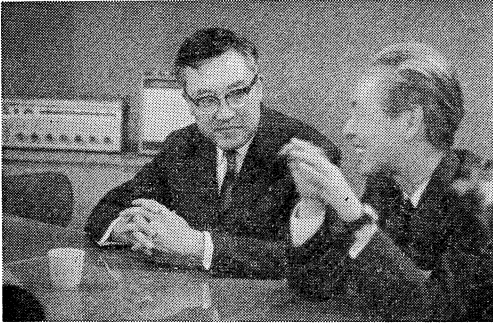
当法人側は高村象平、大浜信泉、山内恭彦の三先生がこの会に出席され、大学セミナー・ハウスの役割と日本の大学問題などについて意見を交換された。講堂に集まった学生の姿を実際に見、かつ討論を交した谷川代議士の感想の一つは、「ここに来るまでは大学問題のなかに、国公立大学が一緒にあって勉強するという重要な課題があることに気づかなかった」ということであった。大学の垣根をとりはずした場所にもう一つの大学があるのである。大衆化した日本の大学には自校で行なう教育と、別の場所で行なう教育との二つの機能が必要なのである。



開館四周年記念晩餐会。ささやかではあるが集まったお顔は最高によい

# グラフに見る人と行事

春から夏の活動を拾う



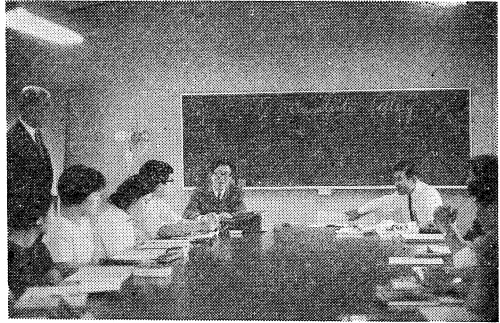
この二人の巨人は初対面らしい。開館四周年の祝宴で朝永・加藤両先生談論する



坂田文相を囲んで。松田・久保田両教授と学生グループ



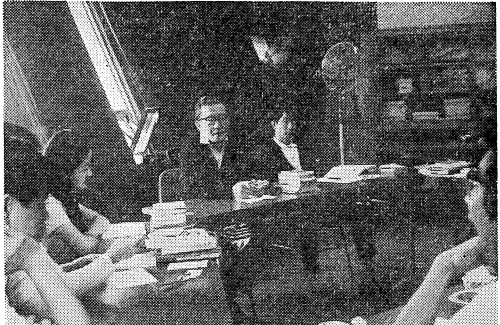
所信を述べる念川和穂氏、大浜・高村両先生も同席で  
——教授、学生との懇談会で——



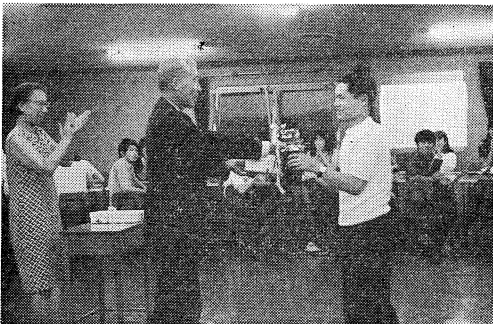
慶大村井実教授の教育学ゼミで飛入り講義の坂田文相



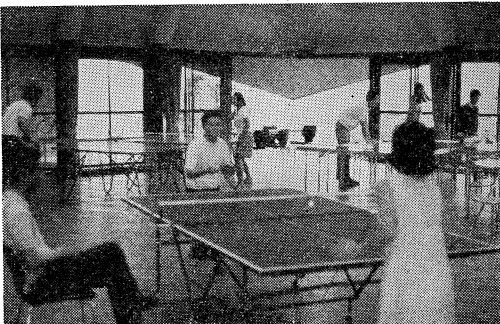
この森、この雑木林はぜひほしいね。買収予定地を視察する大浜、高村、山内三先生と案内する飯田専務理事



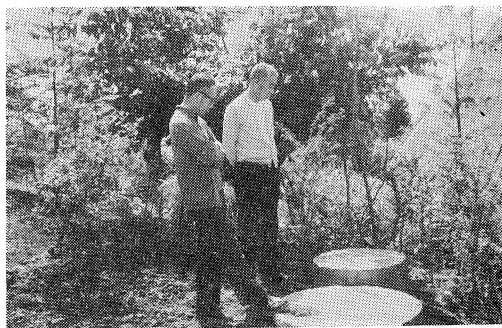
上智大・学内共同セミナー。尾高邦雄教授の産業社会学のセクション演習



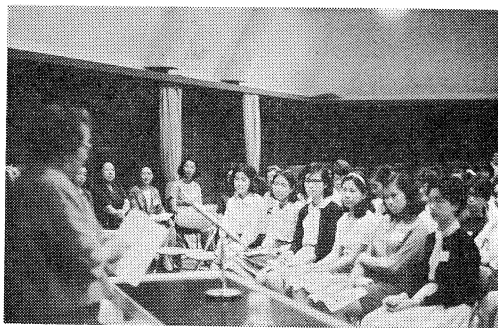
ピンポン大会の優勝杯贈呈風景  
——審査委員長は久保田きぬ子先生——



卓球台新調。こけら落としのピンポン大会



松下館の石臼の庭石を卒業レポートの採点とかで来ていた東大川田侃教授も珍らしそうに眺めている



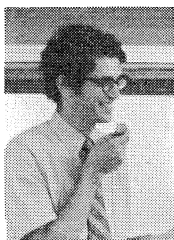
津田塾大フレッシユマン・キャンプ。藤田とき学長の話



職員にまじって道路の補修工事を手伝う学生もいる



端午の節句を祝うカンワモチパーティー  
——専修大津田教授も参加して——



### OUR FIRST EXPERIENCE IN JAPAN

Our primary purpose in coming to the Inter-University Seminar House was for intensive study of the Japanese language and we found it ideal for this purpose. It was of course quiet and peaceful, far from the distractions of Tokyo. Perched atop a scenic hill in the country-

side, it offered a panoramic view.

Of greater importance, however, was the presence of Japanese students from several different universities. Our stay together here was of mutual benefit. Most of the Japanese were here to study English and thus has ample opportunity to improve their conversational skills. The Americans were anxious to learn about Japanese student life first-hand after all they had read about it in American newspapers. Throughout the day and evening groups of students of both nationalities could be found in the main building, in the grounds outside, even in the bath, conversing and forming friendships.

Our stay was pleasant and rewarding.

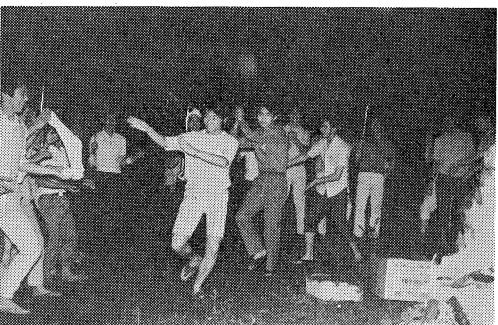
R. P. Bernstein

July 20, 1969

(EIL リーダー, ハーバード大学在学)



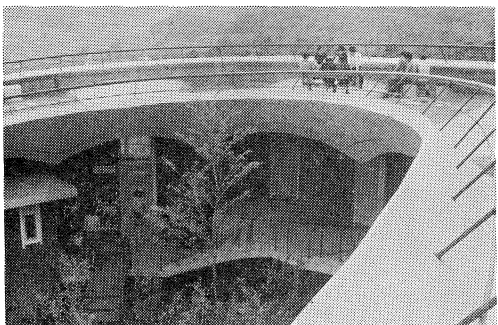
国際色も豊かに野外で対話する日米学生たち  
彼らはどうして交流の機会をつくる



外人学生も交えてキャンプ・ファイヤーを  
楽しむ  
——主催は法政大学技術連盟——



本館広場の夏の夜の風景 外人学生を歓迎して村の娘さんの盆踊り大会



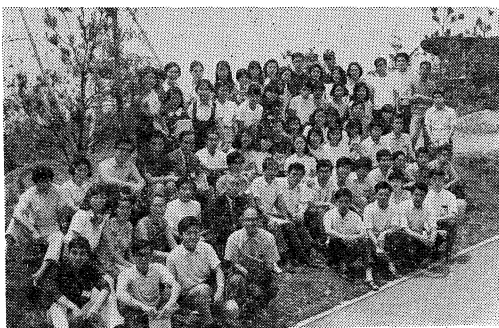
松下館の屋上には涼風を求めて、いつも誰かがいる。ときに青空セミナーもある

学一  
大ナ  
回ミ  
24同  
第共

# ◆主題▲ 大学と人間 新入学生歓迎セミナー

現代を考える

昭和44年6月27・28・29日



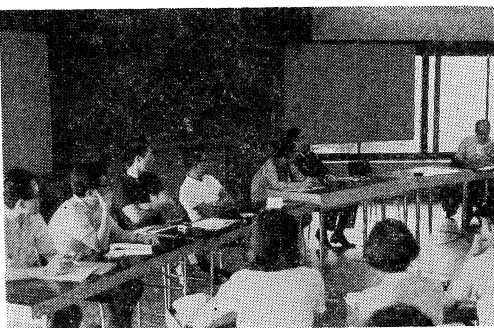
会長

新入学生が学問をする自分の姿勢をかためるためのひとつの機会であってほしい——新入学生歓迎ゲストで見えられた田代茂樹東洋レヨン会長

「真理愛の拠点」は、前田先生のとおきおきの講題であったとのことだが、内容もまた深遠ですばらしく、また、ゲストの田代東洋

「大学問題は解決しなければならぬ、しかし、教育活動は一刻の休止も許されない」という先生方の熱意が、新入学生にどんなに力強く、勇気と感銘を与えたことであるろう。「やっとな学生らしい気持ちになれた。有意義な三日間でした」と異口同音に綴ってくれた感想はその意味では嬉しいことであったが、それは同時に、現在の大学・大学生の苦悩の表現でもあったようだ。

- 〈全体講義〉  
真理愛の拠点  
東京大学教授 前田護郎氏  
〈ゲスト〉  
東洋レヨン会長 田代茂樹氏  
東京大学教授 松田智雄氏  
〈運営委員〉  
立教大学教授 久保田きぬ子氏  
学習院大学教授 児玉久雄氏  
〈セクシオン指導〉  
A 東京大学助教 芳賀 徹氏  
B 青山学院大助教 古銭良一郎氏  
C 東京都立大学教授 清水 誠氏  
D 国際基督教大教授 都留春夫氏  
E 東京工業大助教 早川豊彦氏  
F 東京大学助教 佐藤誠三郎氏  
〈参加学生〉  
六六名(うち女子三七名)  
津田塾大(一二)、早大(八)、フェリス女学院短大(六)、東京女大(四)、日本女大(四)、中央大(四)、慶大(三)、青学大(三)、理科大(三)、ICU(二)、神奈川大(二)、静岡大(二)、東工大、電通大、お茶の水大、横浜国立大、明学大、上智大、武蔵大、立教大、成蹊大、武蔵工大、和光大、多摩美大、武蔵美大各一名



シンポジウム風景。左より佐藤、早川、芳賀、久保田、松田、児玉の諸先生



ラウンジで学生たちの熱心な質問に答えておられる前田護郎先生

## 予告

◆四周年記念共同セミナー

【主題】日本人を考える

—日本人の思想成立—

【期日】昭和四四年一月一、二、三日

〈全体講義〉元法政大学総長 谷川徹三(予定)

〈ゲスト〉ヨゼフ・ピタウ  
〈セクシオン指導〉  
東大助教相良亨、専大教授今井淳、国学院大教授三枝充恵、日本女子大助教源了円、明大教授祖父江孝男、東大助教芳賀徹

レヨン会長の南北問題を中心とする国際的視野にたつたお話しや若き日の人生修業の体験談は、学生の眼を開く名論であった。奉仕グループの学生諸君が会場

の整理、ソーシャル・アワーの司会など運営の裏方を引き受けて活躍してくれたことは、学生参加の新しい型をつくってくれたようでしたのもしい次第である。

▼主題▲ ヨーロッパとは何か  
**第23回大学共同セミナー**

昭和44年5月12・13日

〈全体講義〉

ヨーロッパ論の一視角

東京大学教授 堀米庸三氏

〈セクション演習〉

ヨーロッパ概念の変遷

東京教育大学助教授

清水広一郎氏

近代ヨーロッパと中世

東京大学助教授 成瀬 治氏

現代ヨーロッパと中世

東京都立大学助教授

遅塚忠躬氏

共同セミナーの教授団。左より清水、成瀬、遅塚、堀米の諸先生

〈参加学生〉

二八名(うち女子一一名)

早大(五)、津田塾大(五)、成蹊大(三)、一橋大(二)、慶大(二)、上智大(二)、学芸大、電通大、都立大、日本女大、東京女大、青学大、東海大、東洋大、共立薬大各一名

◇ ◇ ◇

このセミナーは、昨秋一〇月に実施した大学共同セミナーと同じ題のもので、応募者が多く、前期せずして肩を組み合った！ 共同セミナー送別夕食会



回、受講できなかった学生の要望に添えて、再び開講した、いわばアンコール・セミナーである。おからの大学紛争のため、難しい都合をくりあわせての会期となり、参加学生は、当初の予定よりも少人数となったが、それだけに、きわめてせいたくな、密度の高いセクション演習が行なわれた。

全体指導の堀米先生は、「ギリシャ・ローマの古典古代史は、なぜ、ヨーロッパ史の第一章を成すのか」という課題を導入句に、歴史というものの考え方・本質をキメ細かく、懇切に解き明かされた。これを受けた各先生方を囲むシンポジウムは、散会が深更に及ぶほど興味にあふれたものになった。

なかでも、今年がちょうど生誕五百年にあたるマキアヴェリの著作の系譜を引例しての、流動する社会の価値感・状況の中にある歴史家の立場をめぐる話題などは時宜にかなない印象深かった。

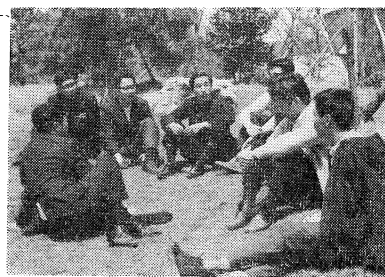
また、セミナー・ハウスの視察にみえられた谷川和穂議員(自民党・文教部会長)を迎えて、文教問題をめぐる討論会がプログラムに加えられた。文教の衝に当たる政治家と学生・教授が、静かに、しかも心おきなく論じ合い、語り継ぐ対話の時間と場に恵まれるなど、望外の収穫を得たセミナーでもあった。

年ごとに増加するオリエンテーション実施校

—各大学とも特色を織りこんで—

当セミナー・ハウスの新入学生歓迎セミナーの頃は、各大学の新入生に対するオリエンテーションの最盛期でもある。

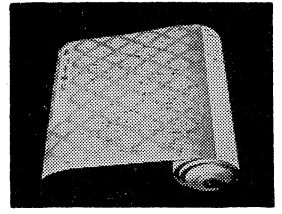
学長以下全教官が泊まりこんでいた津田塾大学をはじめ、それぞれの大学の特色を発揮した多彩なプログラムが展開され、この丘にも新学年の息吹きが漂っていた。



芝生の上でも友情がつつかわれた  
 —武蔵工大の新歓セミナーより—

〈実施校〉	〈人数〉	〈期 日〉
東邦大学新入生オリエンテーション	(174名)	4/15—19
東京学芸大学新入生歓迎セミナー	(455名)	4/26—27, 5/31—6/1, 6/7—8, 7/5—6
武蔵工業大学新入生歓迎セミナー	(1,347名)	4/28—5/2, 5/6—12
白梅学園短期大学オリエンテーションセミナー	(239名)	5/14—16, 5/17—19
東京都立工業短期大学新入生オリエンテーション	(86名)	5/16—17
東京都立大学経済学部新入生ガイダンス	(53名)	5/17—18
東京都立大学土木工学科新入生・教授交歓会	(37名)	5/17—18
東京都立大学法学部新入生・教授交歓会	(42名)	5/31—6/1
職業訓練大学校新入生オリエンテーション	(120名)	5/19—20
津田塾大学フレッシュマン・キャンプ	(491名)	5/23—24, 6/6—7
日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション	(90名)	5/24—25
お茶の水女子大学新入生オリエンテーション	(232名)	6/22—23, 7/1—3, 7/6—8
上智大学物理学科新入生オリエンテーション	(52名)	6/24—25
東京工業大学工学部人文社会群新入生セミナー	(33名)	7/10—11





蔵書しだいに充実  
著者の寄贈もあって

- 「岩波講座 世界歴史」第一、七、四巻、「岩波講座 哲学」第一一八巻 岩波書店殿
- 「大塚久雄著作集」第五、六巻 大塚久雄殿
- 「芸術、信仰、青春」 小塩節殿
- 「アジアの挑戦」 川田侃殿
- 「優秀性」 讀歧和家殿
- 「子どもの生活圏」 一番ヶ瀬康子殿

- 「国際経済機構の研究」 「ベトナム戦争と国際法」 「国際投資の法的保護」 「国際法現代文献解説」 佐藤和男殿
- 「ワールドビジネスの経営戦略」 「21世紀の産業社会」 佐藤喜一郎殿

セミナー・ハウスにおいてになる先生方が、ご自分の著書を贈ってくださるので蔵書が充実してきました。堀米康三先生のお世話を願ひ岩波書店から、岩波講座「世界歴史」を、中央公論社から「世界の名著」をご寄贈いただいた。ご好意に感謝するとともに著書を贈ってくださった先生方に出版のお祝いを申し上げます。

■寄贈図書

(昭和44年5月〜7月)  
「融雪杭」 「気象と生活」 「くらしの歳時記」 「工業と天候」 「季語辞典」 産業科学学会殿  
「八王子市恩方地方における考古学的調査」 八王子市教育委員会殿

- 「新しい大学像をもとめて」 大河内一男殿
- 「義理と人情」 源了円殿
- 「大河内一男著作集」 第五巻 大河内一男殿
- 「平和の建設」 「世界の建設」 安セルモ・マタイス殿
- 「人間論の諸問題」 「ソフィア」 上智大学殿

■自画自賛

▼大学英語教育学会は、この夏三週間の集中研修を行なった。世話役の松山先生は何かと苦勞されたいらしいが、参加者のアンケートによれば、当ハウスの職員に対する不平不満が少しもなかったことに、大変感激されていた。

▼「螢雪時代」の記者がいうことに、「先生と学生が仲良く勉強している写真がほしいのだが、現在では当ハウスがおそらく日本では一カ所、そのような写真がとれるところだろう。——同誌九月号は五、六ページを費して当ハウスの写真をのせている。題して「こゝに對話あり」

- 「産業社会学」 「日本の経営」 工学院大学研究報告」第二六号 工学院大学殿
- 「告白と抵抗・プロテスト」 「日本列島の将来像」上・中・下 井門富二夫殿
- 「総長十二年の歩み」 「政治経済史学」七二〜七七号 彦由一太殿

■施設拡充資金寄付者芳名(第10回報告 昭和44年5〜7月)  
ご支援を感謝して拝受いたしました。



ご寄贈の石灯笼のそばで(松下館中庭)、佐藤和男拓大教授

- 一〇,〇〇〇円 早稲田大学生産研究所殿
- 六,三五〇円 慶応義塾大学 高村ゼミ殿
- 二,〇〇〇円 専修大学 津田ゼミ殿
- 三,〇〇〇円 日本電気社員 青木孝雄殿
- 三,〇〇〇円 立正大学 杉沢ゼミ殿
- 三,八三〇円 都立工業短期大学 矢内ゼミ殿
- 一,〇〇〇円 青山学院大学 原ゼミ殿
- 三,〇〇〇円 明治大学 河野ゼミ殿
- 四,〇〇〇円 電気通信研究所殿
- 一,〇〇〇円 日本女子大学教授 一番ヶ瀬康子殿
- 三,七二〇円 東京大学教授 松田智雄殿
- 二,〇〇〇円 日本女子大学女子教育研究所員 山本和代殿
- 一,〇〇〇円 東京都立大学教授 伊丹 潔殿

●特別指定寄付者芳名

- 【植樹】 二,三〇〇円 第二三回大学共同セミナー殿
- 一〇,〇〇〇円 職業訓練大学校 新入生セミナー殿
- 五,〇〇〇円 光印刷(株)社長 南部圭三殿
- 五,五〇〇円 電気通信研究所殿
- 二,〇〇〇円 日本印刷技術協会殿
- 六,〇〇〇円 お茶の水女子大学 新入生セミナー殿
- 【花瓶】 一,〇〇〇円 日本女子大学女子教育研究所員 山本和代殿

利用状況

◆五月

- 慶応義塾大学教授 高村 象平
- 電気通信大学教授 金原 寿郎
- 専修大学美術研究会(新入生) 芝田 進午
- 法政大学教授 芝田 進午
- 国立キリスト教会(聖書研究) 岩田 一男
- 一橋大学国際部 岩田 一男
- 東京女子大学助教 黒星 瑩一
- 東京工業大学教授 辻内 順平
- 日本ワールド・フレンドシップ・アソシエーション(研修会) 津田 昇
- 専修大学教授 津田 昇
- 青山学院大学助教 関田 寛雄
- 学習院大学助教 江沢 洋
- 武蔵工業大学(新入生) 江沢 洋
- 近代労研(リーダーシップ講座) 江沢 洋
- 国際学生技術研修協会 江沢 洋
- 立正大学助教 杉沢 新一
- 白梅学園短大保育科(新入生) 杉沢 新一
- 東京都立工業短期大学生産管理学科・機械学科(新入生) 杉沢 新一
- 順天堂大学教授 関根 隆光
- 東京都立大学教授 関根 隆光
- 青山学院大学助教 原 嘉彦
- 青山学院大学助教 原 嘉彦
- 東京都立大学助教 湯浅 欽史
- 青山学院大学助教 古銭良一郎
- 職業訓練大学校(新入生) 古銭良一郎
- 産業関係研究協会(労務担当者) 古銭良一郎
- 東京家政学院大助教 酒井 敏
- 東京都立大学助手 木村 鍊一
- 法政大学教授 栢野 晴夫
- 日本女子大学教授 杉沢 一言
- 東京経済大学教授 江夏美千穂
- 立教大学教授 久保田きぬ子

